

4. ショプロン

路線バスの乗り継ぎ

翌日は小雨の降る陰鬱な朝を迎えた。朝食時にいた宿のスタッフは年配のおばさんだけでドイツ語？はともかく英語は話さない。しかしガイドブックの当該宿部分を見せ、泊まる日などの数字と、私の名前を書いたメモホルダーをMy name と云いながら示すと要点は伝わり電話してくれた。8時に掛けたときは反応がなく、9時に再度要望。第一希望はファックスに切り替わっていたため第二希望に電話して何とか予約できる。電話代100Ft(37円)を宿代に追加された。かかった費用を払う

ことにやぶさかではないが、「珍しいな？」と思ったのも正直なところだ。

ちなみに二泊の料金は電話代込みで18,200Ft(6,685円)で、設備や部屋の広さからすると充分満足できるものだった。

雨が降らなければ列車の方が好みだけれど、本降りになった今、傘を差しキャリアカートを引っ張って駅までの1キロを歩くのは嫌だった。バスの発車時刻は10時なので余裕を見込みながらもぎりぎりの9時47分に宿を出た。

定刻に来たバスは既に数人の乗客があり、この停留所から10人弱が乗り込む。こまめに停車を繰り返す間もなく満席で立つ人も多くなる。11時10分前にジュール

到着した。これならばジュールからショプロンへのバスにすぐ乗り継げるはずだ。

ところが切符売り場には四つの窓口それぞれ10人くらいの行列が出来、ようやく窓口辿り着けば切符はバスの車内で買えという。それではと乗り場を尋ねると、「インフォメーションで訊け。」の不親切な対応だ。結局うろろうろしている間に11時のバスは走り去ってしまった。

次の便は12時発で、待ち時間としては中途半端だった。時刻的には早めの昼飯にしても良いのだが、バスステーションに隣接する食事処は、「飢えを満たせばよい。」みたいな要望に合わせたような所ばかりだ。さればといって然るべき食堂を求めて探し歩くのは、土地勘のない街にいる異邦人というハンディキャップを抱えて1時間ではどうしようもない。

仕方なくひたすら待った。待ち時間が少なくなったところでトイレへ行く。ショプロンまでは2時間強掛かるので用心したのだ。料金は120Ft(44円)だった。後は乗車位置で待つ。



パンノンハルマからジュールまで利用したバスの車内。

定刻5分前ぐらいにインフォメーションの屋根に設置されているスピーカーからショプロン行きバスに関する案内(ショプロン以外は意味不明)が流れる。今回を含めて三回のバス利用からいえば、ハンガリーでは運行ダイヤが厳守されている。

車内で買ったショプロンまで約90キロの運賃は1,860Ft(683円)だ。定刻に発車し、ショプロンまで実際に要した時間は約1時

間40分だったけれど、悪天候で視界が不良だったこともあり特筆するようなこともないまま過ぎた。幹線道路を離れ市街地をしばらく行き十数台のバスが並ぶ広い駐車場に到着。1時43分だった。

バスステーションから踏み出すのに時間が掛かった。英ガイドの地図と周囲を見比べて、方角が見定められなかったのだ。通行人に訊きたいところだけれど、宿は知名度が低そうだし、そのそばにはこれといったランドマークもない。しばらく観察と思案を重ね、思い切って歩き出した。しかし10メートルほどでおかしいと気付く。戻って90度進行方向を変更した。小雨は続いているが傘はいらない。しばらく歩いて地図と道路の状況変化が合致しているので一安心する。8分ほどで目指す宿ヴィ



ジュールからショプロンまで利用したバスの車内

エデン・ペンション辿り着くことが出来た。

フロントにいたのは化粧の派手な若い女性で、私としては敬遠したいタイプだが、対応はしっかりしていた。いつも通り部屋の下見を先行する。裏通りに面して1階の部屋だけれど窓の位置は道路からだど4メートルほどの高さになる。景観などはさっぱりだが、他の部屋でも同じような事だろう。フロントへ戻りチェックインした。

既に2時を廻っている。荷物を部屋に放り込むようにしてカメラと電子辞書を持ち食事に出かけた。目指したのは宿の筋向かいにある食堂イーガラムで、ドイツ語のために予約できなかったイーガラム・ペンションと同一経営だ。

店の中には先客が二組と一人いた。いずれも中高年で会話も抑制されたものだったので、屋下がり落ち着いた雰囲気。ウェイターが持ってきたお品書きには、(多分)マジヤール語、ドイツ語、英語の順で品名のみならず簡単なレシピが記されている。これを参考に、「カリフラワーのシチューに野菜の微塵切りを揚げたもの。」と、



上: 食堂イーガラム内部。下: カリフラワーのシチュー。



イノシシの肩肉。下はタマネギやジャガイモがある程度片付いた状態。

「イノシシの肩肉をベーコンと共にゆっくり調理し、ピクルソースで和え、ダックの油で揚げたジャガイモとタマネギを添えたもの。」を注文した。するとウェーターが、「本当にこれでよいのか？」みたいなことを再三確認する。後で思い出したが、英ガイドには分量も注文できると書いてあったし、そのぐらいが適当だった。執筆にあたり英ガイドを読み直すと、店紹介の冒頭に、「店のスローガンは ”ガツガツ呑み食いする胃腸のためのレストラン” . . . 」などがあった。量の多さは此処でのお決まりらしい。

閑話休題。酒はハウスワインをグラスで頼んだ。話が前後するが、ワインはすぐ運ばれてきたものの、それ以外は籠に入ったパンが置かれただけだ。仕方なくこれをツマミに少しずつ飲んで待つ。それでも間が持たず、一杯追加する羽目になった。半時間近くして猪とスープがほとんど同時にもたらされた。

カリフラワーのシチューを食すのは初体験だが美味かった。それにもまして気に入ったのは猪だけれど、登場した時点でその量に圧倒され、その意味では最初から食傷してしまったことも事実だ。ともかく途中でワインを追加し黙々と食べ続け、何とか三分の二ほどを平らげた。

この辺りで限界と感じる。後から考えれば、「持ち帰り」を頼めば良かったと思うが、なぜかこのときはそんな智慧も浮かばなかった。勘定は猪2,790Ft(1,025円)、シチュー890Ft(327円)、ワイン4杯792Ft(291円)の合計4,472Ft(1,643円)は格安だと思う。単純な比較は出来ないがジュールのマトローズはさらに安かったけれど、質とそれに莫大ともいえる量を考えると、此処の安さが際だつた。

宿へ帰って前日同様ベッドに身を投げ出す。いい年をして二日も連続的に食べすぎで討ち死にとは恥ずかしいことだ。ともかくじっとして胃の腑が落ち着くのを待った。しかし寝ているとこの部屋が意外に騒々しいことに気付く。窓の下はいかにもうらぶれた通りなのに、抜け道なのか交通量は予想外に多い。これは夜が更けてからも変わらなかった。

5時頃になりようやく食べ過ぎ状態もそれなりに落ち着き、買い物に出かけた。ツマミもさることながら酒を調達しなければならない。散歩がてら旧市街の方へ向かった。



ショプロンは旧市街(前ページの平面図で薄赤く着色された部分)への車輛進入が制限され、旧市街の外周に環状道路がある。この沿道が商店街となっていた。ミニ・スーパーマーケットがすぐに見付かり此处でウォッカなどをスーパーバスケットに入れ、レジでクレジットカードを出した。するとレジ係の女店員がいきなり威丈高に何事か喋り出した。マジヤール語だけなので良く判らないが、「カードは駄目だ!」ということらしい。入り口のドアにはカードのステッカーも貼ってあり、仮にそれがなかったとしても、何かこちらが不正なことをしたと云わんばかりの、許しがたい態度だ。

ともかく酒だけは必需品だから現金で買い物を済ませた。しかしこちらも激高したためか、レシートを貰い忘れてしまった。修行が足りないと反省。うろ覚えの記憶ではヨーグルト120Ft(44円)、ウォッカ700cc 4,100Ft(1,506円)など。ハムは全く判らなくなってしまった。



ツマミ用に買ったハム。美味かった。

旧市街散策

6時半に目を覚ましたときには既に辺りは明け切っている。チェックインした際に、朝食は8時半からと云われたので朝飯前に辺りを散歩することにした。7時になって街歩き用の装備を調べ宿を出る。泊まった部屋から見えるカフェは、コーヒーと軽食の人々で混雑していたので、ちょっと気を惹かれたものの素通りする。

昨日買い物をした環状線にでると車輛や歩行者の往来はかなり

のものだった。室内に灯りの点るガラス窓があり、のぞいてみると理髪店だ。日本ならば大体9時頃開店だから随分早くから営業していると驚いた。しかし

考えてみれば勤務時間中に散髪するのは厳しく見れば怠業だし、それならば退勤時より出勤前にすっきりさせる方が合理的かもしれない。

環状線を横断し、火の見塔の基部に設けられた門から旧市街に入った。この塔は高さが61メートルあり、ローマ遺跡を基礎に利用し12世紀に建設された。街のシンボリック建物で、頂部からの景観は素晴らしいらしく、条件が良ければ遠くオーストリアアルプスまで望まれる(英ガイド)。しかし11月から3月は冬期休業中だった。



理髪店。6時56分。



火の見塔。



セーチェーニ広場の三位一体像。背後は山羊教会の鐘楼。

門を抜けてすぐのところがセーチェーニ広場だ。中央には三位一体像で南側に山羊教会、北側にシュトルノの家など、この街の観光目玉とも云うべきものが揃っている。三位一体像は日ガイドによれば、「レーベンブルク伯爵が街をペストから救うため17世紀末に作った。〈中略〉バロック様式の群像としてはハンガリーに残る数少ない傑作」とのことだ。なぜ像を作るとペストから救済されるのか良く判らないが、「神に捧げ物をすればその恩寵がある。」ということなのだろうか。

広場から南へ向かうと道なりでちろんまりしたオルショヤ広場に出た。中央にマリアの泉と呼ばれている聖母子像(多分噴水)があり、東側に修道院のファサードが見えた。正面玄関を出入りする人がいるので、中を覗いてみた。ガラスの内扉越しにミサが行われ数十人が参列しているのが見える。中でも目を惹かれたのが、通学途上らしい小学生の姿だった。カソリックが生活に密着しているように感じられる。

ミサの情景を撮影したかったが、ガラス越しでは鮮明に写らないだろうし、中へ入っての撮影は不作法と遠慮した。今思えばガラス越しでも映像が見たかった。

さらに南下を続けると100メートルほどで車道にぶつかる。広い緑地が中央分離帯となり2車線ずつの車道は、札幌の大通り(公園)を彷彿させる。通りの名も、「セーチェーニ広場」なのでますます大通公園似だ。とにかくここで旧市街は終わりということらしいが、時刻はまだ7時半なので南下を続けた。朝食にはまだ早過ぎるし、鉄道駅まで行って列車ダイヤや経路などを見ておきたかったのだ。

セーチェーニ広場を東へ行くとすぐマーチャーシュ・キーライ通りとの交差点になり、聖ジュードタデウス・ドミニカン教会が双頭の鐘楼を持つファサードを聳えさせていた。この四つ辻を曲がって南へ行くと突き当たりが駅だ。途中、観光案内所を見かけたが、ジュールやパンノンハルマ同様休業中だ。しかし別段訊きたいことがないのもこれまでと同じだった。

四つ辻から10分弱で小さいながらも駅前広場のあるショプロン駅に着く。鉄筋コンクリート造り2階建ての駅舎は、人口6万弱の街としては大きなものだった。此处からブダペスト



オルショヤ広場。マリアの泉と背後に聖ウルスラ教会のファサード。



聖ジュードタデウス・ドミニカン教会。

Abfahrt		Induló vonatok		Departures	
Idő Zeit	Vonat Zug	Útirány Nach	Vágány Bahnsteig	Megjegyzés Hinweis	
07:49	Regioexpr.	Deutschkreutz	5a+5b		
08:01	Regionálz.	Wiener-Neustadt	7a+7b		
08:13	Regioexpr.	Ebenfurth-Wien Meidling	5a+5b		
08:12	Nemzetközi	Szombathely-Zágráb	1a+1b	Zágráb	
08:15	Regionálz.	Wiener-Neustadt	7a+7b		
08:49	Regioexpr.	Deutschkreutz	5a+5b		
09:00	Regioexpr.	Wiener-Neustadt	7a+7b		
09:10	IC Túztorony	Győr-Budapest-Keleti pu.	1a+1b	Helyjegyeköteles	

Kellemes utazást kívánunk!

方面や国内線で南下するもの、ウィーンや同じくオーストリアのウィナー・ノイシュタットへ行く国際線など、四路線が伸びる交通の要衝ゆえだろう。インフォメーションの出発便を見ると、一時間の間にドイツクロイツ(オーストリア)、ウィナー・ノイシュタット2便、ウィーン、ザグレブと国際線ばかり5便もあった。

もっとも国際線と聞いて国内線との差を強く意識してしまうのは日本人ゆえのことで、彼等に見れば二重帝国時代に同一国であった感覚や、EC加盟後のパスポート不要な越境などでほとんど差など感じていないのかもしれない。実際インフォメーションの表示も国際列車となっているのはザグレブ行きだけだった。

ホームも見物してみる。4列あり、天井から下がる案内表示にはホーム番号と、液晶表示で行き先と発車時刻が表示されている。これならば私のような心配性のものでも安心して列車を待つことが出来る。

下見を終えて宿へ向かった。今度は旧市街を通らずマーチャーシュ・キーライ通りからそれに続くヴェーケンレット通りに行く。旧市街に商店はほとんどないが、この通りは両側に軒を並べていた。しかし時刻が早過ぎて開

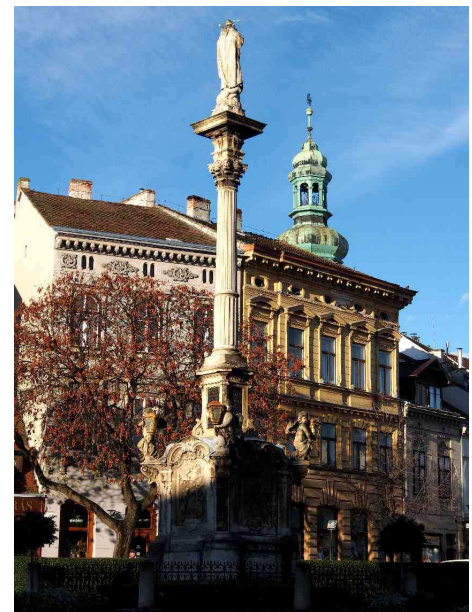
店しているところはない。そんなことで素通りし、先ほど旧市街へ入り込んだ北入口付近まで戻ってきた。

宿へ戻る前にちょっと寄り道をしてイーガラム・ペンションの外観を見に行く。いささか未練がましいが英ガイドに18世紀の氷貯蔵庫を改造して宿にしたと紹介されているのが気になっていた。なるほど煉瓦の装飾が美しい(なんで貯蔵庫にそんなものが必要なのか?)建物魅力的だった。内装が外観に相応しければ素晴らしいだろう。滞在しないで判断も出来ないが、「逃がした魚は大きい」で、損したような気分になる。

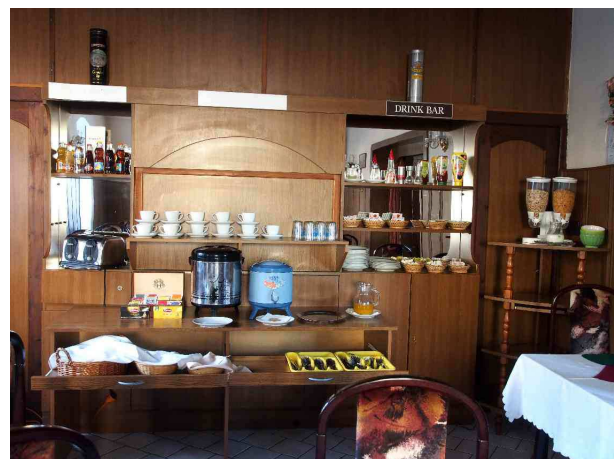
宿へ戻ったが8時半になっても朝食の準備は整わずしばらく待たされる。出されたものも貧弱だったし、この宿に対する評価は下がる一方だ。



上: 液晶表示の出発便案内。下: 手動回転式発車時刻表。



旧市街北入口付近。後ろに火の見塔。



上: 朝食堂。下: 泊まった部屋。

朝食は済ませたが、その後も部屋で日英ガイドの記載にインターネットの情報も加味して今後の予定(巡る場所の選定)を行った。既に候補となっていたのはドナウ河河畔の街エステルゴムと、北部の村で世界遺産にも登録されているホッロクーだった。しかしこれだけでは日数的に余ってしまうので、もう一、二箇所見付けたい。こんな用途には画像情報の多い日ガイドが向いていた。

2時間ほどかけて一応結論らしきものがでる。南部の街ペーチは世界遺産でもあるし、比較的行きやすい。ガイドブックが割いているページの多さは、見所の多さと無関係ではあるまい。この街を入れれば今後の順路は、エステルゴム→ブダペスト(乗り換え)→ペーチ→ホッロクー→ブダペスト(乗り換え)→ブクレシュティ(日本では通常ブカレスト)(ルーマニア)と仮決めした。

教会巡り

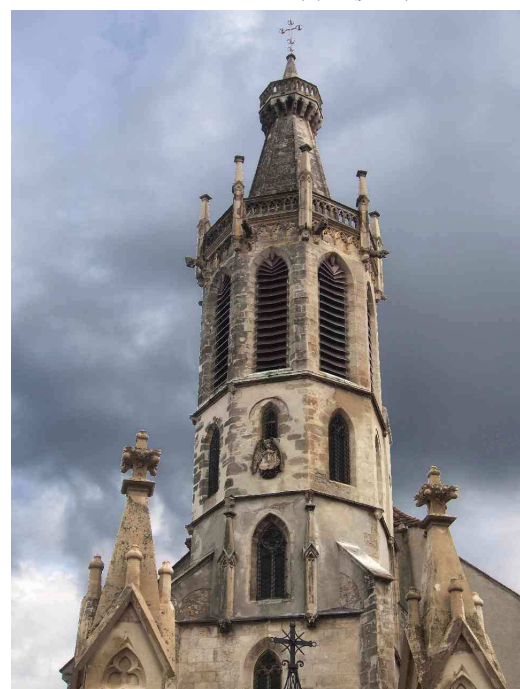
旅程が定まったところで散歩に出かける。ショプロンは見所の乏しい街なので、目指すところはこれと云ってない。しかし朝飯前に旧市街を一応歩いたので、それを北部の小高いところから眺めてみることにした。日英ガイドの地図では宿から北は範囲外なので、適当に歩いてみるしかない。こんなことをするときの勘は悪い方だが、道を間違えたと気付けば引き返せばよいし、先を急ぐ必要がないどころか暇潰しの種を探しているような状態だ。のんびり構えて歩き出した。

間もなく前方にゴシック様式とおぼしき鐘楼が見えたので、これを目指して行く。近付いてみると規模としては割に小さいもので、無骨な姿はロマネスクとの端境期に建設されたものかもしれない。

執筆にあたり調べなおしたところ聖ミカエル教会で、建設が始まったのは1278年で完成したのは14世紀らしい。一時期は近隣の崇敬を集め、貴重な美術品もあったようだが、聖像破壊運動(ビルダーシュトゥルム(絵画嵐))の被害を受けたりし、現在は見るべきものもない。

聖ミカエル教会を出てさらに直進すると程なく真円形のロータリーがあり、六差路になっている。向こう側にも教会が見えたので、車が途切れるのをしばらく待って見物に行く。しかし規模の小さい地味な教会で、おまけにドアは閉ざされていた。

ロータリーで東西に繋がる幹線道路はB4号線で相互一車線道路の交通量は多い。しかし車道から離れて幅広い歩道があったのでこれを旧市街の北側に行くことになるように西へ向かう。数分歩いたところで若干小高くなり、視界を遮っていた人家が途切れたところへ辿り着く。しかしそこからの旧市街は大した景観ではなかった。



聖ミカエル教会。



北部から眺める旧市街。青銅色の屋根を持つ塔は火の見塔。その右後方に山羊教会の鐘楼。

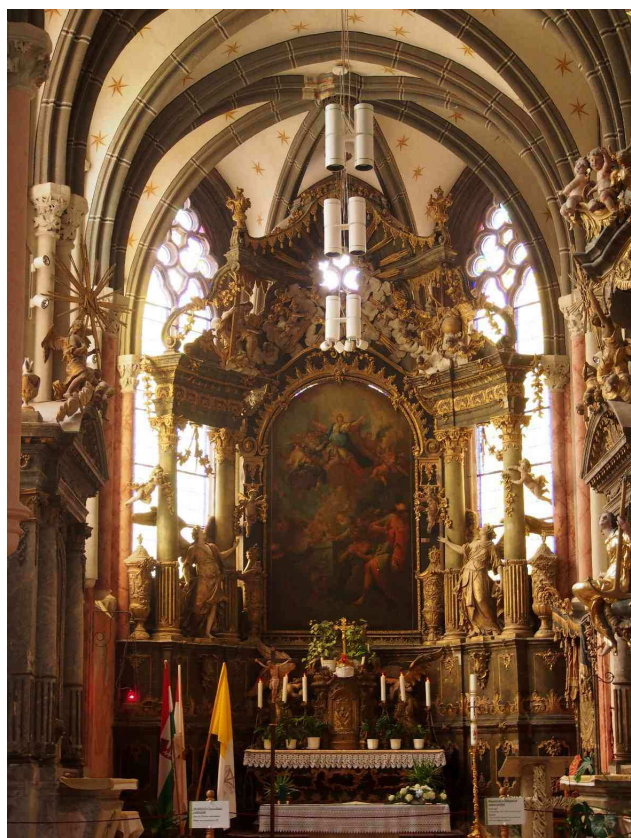
次のロータリーでB4号線を離れ、旧市街へと戻った。再び火の見塔の門から中央広場に出る。先ほどは扉を閉ざしていた山羊教会を訪ねた。ちなみに日ガイドによればこの風変わりな名前は、「山羊飼いがイセルの山羊が掘り当てた埋蔵金をこの教会に寄付したので．．．」などに由来するそうだ。英ガイドには埋蔵金の話などなく、「主たる寄進者だったガイセル家の紋章が山羊だったため。」と素っ気ない。

中に入りすぐのところまで料金を支払った。しかしなぜか切符などの資料を紛失し、金額が判らなくなったばかりか、この課金が入場に対するものなのか、撮影なのか、はたまた主要なものに対する音声のガイドなのかも記憶がない。

余談になるがこれまで訪れたヨーロッパの教会で、入場することに課金するのはハンガリーが初めてだ。例えばモンレアレ(シチリア)のドゥオモでは回廊や屋上展望台見物に対して、スプリット(クロアチア)のカテドラルでは塔に登るとき、ブルガリアでは撮影をする場合に課金された。ブダペストのマーチャーシュ教会で中に入るだけでも入場券が必要だったのは既に記した通りだ。

閑話休題。料金を支払うと木製の棒を渡される。太さ2センチ弱で断面は長方形、長さは20センチほどで、仕上げが雑なのか面がいびつだ。何に使用するか判らず尋ねると、係りのオジサンはカウンターを出て教会の一部が撮影され四つ切りに印刷されたものの前へ行くと、その前に置かれた機械の四角い孔に棒を突き刺した。要するに棒が一種の鍵であり、この操作により解説が聞けるのだ。しかし解説にあまり興味はなく、おまけに英語耳に問題があるので、実際にはほとんど使用しなかった。

ともかく教会内巡回を開始した。13世紀に創建されその後度々改修された山羊教会は規模的には小さく、目を見張るような豪壮さはない。しかしバロックを中心とした内装は上品で良質なものと思われた。



山羊教会の後陣。



山羊教会の奥にあった小礼拝堂入り口上部のフレスコ画。解説等がないので不確かだがロマネスクだと思う。



教会を出て南へ向かいオルシヨヤ広場を再訪する。この広場の少し北側には英ガイドが推奨する宿の一つ、パラティノシュがあるので一応外観を確かめた。落ち着いた感じで品がよい。内部は見なかったし泊まらずにあれこれの評価

できないとしても、間違いなく魅力的だったのは立地だ。旧市街のど真ん中ともいえる位置で、石畳の街路は旧きヨーロッパの雰囲気満ちている。一般車両が入れない地域だから、ヴィエデン・ペンションのように抜け道を通行する車両騒音に終日悩まされるようなこともない。部屋数も多そうだし、英語は通じるだろうと考えられ、泊まろうとしなかったことを残念に感じる。



朝は通らなかったセント・ジョージ通りを北上し中央広場へ向かう。途中に白と赤のファサードが瀟洒な教会が目をつけた。後から判ったことだが通り名の由来となっているセント・ジョージ(聖ゲオルギオス)教会だ。

幸い扉を押すと中に入ることが出来た。内部は派手ばでしきや豪華さとは無縁だが、祈りを捧げる場に相応しい荘厳

さと静謐さに満ちていた。信徒も観光客もいなかったこともありしばらくの間この場の雰囲気を堪能する。

教会を出ると北上を再開し、中央広場から右へ曲がって城壁の遺跡上に出る。この城壁は元を質せばローマが築いたもので、9世紀から11世紀にかけてハンガリー王国が修復したらしい。しかし現存している部分は規模的に大したものではなく、それもごく短い部分だけなので撮影することも忘れて通り過ぎてしまった。

朝も歩いた旧市街を迂回する環状道路に出てしばらく商店の店頭に並ぶものを見物しながら歩いた。アウトドア用品の店では布とパイプで出来たラウンジチェアが置かれ、私が自宅で使用しているものとそっくりだった。しかし値段を見ると2,990Ft(1,098円)で、日本の通信販売ならばこれより若干安いので意外だ。日本でもメーカーのページには3,000円で載っているから、此処での表示もそんなものかもしれない。

その他風変わりな椅子もある。どうやら水中にセットするらしいが、値段は45,900Ft(16,859円)とかなりのものだ。



釣り用椅子(?)水中の多少凸凹があるところでも設置でき、一段高い所に坐るらしい。



ひと当たり商店を眺めたのち、一旦宿でシャワーを浴びる。一休みした後、次の訪問地エステルゴムの宿予約をフロントに依頼した。例のごとく英ガイドの候補二軒をマーカーで塗ってこれを見せた。第一候補は満室だった。此处は英ガイドにはフレンドリーな番犬がいると書かれていて、この子との出会いを期待していたので残念に思う。結局二軒目のリオ・ポンズー(リオペンション)で決まった。



2時近くなった頃に昨日と同じ食堂イーガラムで昼食にする。昨日と同じテーブルに着くと、既に顔馴染みになった感じのするウェ이터がお品書きを持ってきた。

食べきれなかった反省から、彼に相談して量の少なめな、スパイシーな野菜スープとメインには鴨のレバーに付け合わせはマッシュポテトと焼きアプリコットを選ぶ。酒はハウスワインの赤をグラスで頼んだ。



スープはそれでも量が多いと思ったものの、お品書き通りスパイシーで野菜がたっぷり食べられるのが嬉しい。ともかくこれを平らげてワインを飲みながら待つこと10分で鴨のレバーが登場した。鶏のレバーとよく似た食感だがこれも美味かった。付け合わせのマッシュポテトとアプリコットも相性がよい。今回は無事完食することが出来た。勘定はスープ640Ft(235円)、鴨レバー1,690Ft(621円)、ワイン5杯990Ft(364円)で、相変わらず格安だ。前日のチップも込みのつもりで4,000Ft(1,469円)をテーブルに置く。



この日も早々晩酌を終え、就寝した。何時頃か不明だが目を覚ましたとき、隣室からの笑い声がもろ聞こえてくる。テレビの音声などではないようだ。すぐ止んだと思ったらしばらくして今度はいびきだ。宿に対する評価は最低となった。

上:スープ。汁気をだいぶ減らしてから。中上:焼き鴨の肝臓、マッシュポテトと焼きアプリコット。中下:肝臓とマッシュポテト拡大。下:アプリコット拡大。